

第8回学習院大学身体表象文化学会大会 研究発表要旨集

日時：2024年7月13日

於：学習院大学西5号館2階201教室

《プログラム》

13:00 第一部：研究発表（発表：25分 質疑応答：10分）

・研究発表1（13:05-13:40）

「ストーリー・マンガにおける「語り」をめぐって——作品論への接続という観点から」

松下茉由（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

・研究発表2（13:40-14:15）

「〈黒い動物〉から〈指揮者〉へ——1930年代のディズニー製アニメーション作品におけるミッキーマウスの「変質」について」

岡田尚文（学習院大学ほか非常勤講師）

・研究発表3（14:15-14:50）

「マンガ『ゴールデンカムイ』にみるイレズミ表象の独自性——身体に地図として彫られた「刺青人皮」」

後藤美濤（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

15:00 第二部：トークセッション

「生きづらさ」を捉えるまなざし

登壇者：野本梢（映画監督）、田丸理砂（学習院大学教授）

司会者：関根麻里恵（早稲田大学ほか非常勤講師）

発表 1

「ストーリー・マンガにおける「語り」をめぐって——作品論への接続という観点から」

発表：松下茉由（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

司会：野田謙介（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士後期課程）

【発表要旨】

文学研究は、解釈の可能性を広げる手続きとして、物語から作者の「意図」へ迫る読解を避けるために、テキストごとに異なる主体、すなわち「語り手」という概念を生み出した。現実には肉体を持つ作者とは異なる「語り手」は、テキストにおける記号の選択や配列の責任を負う表現主体である。そしてまた、物語メディアである、いわゆる「ストーリー・マンガ」においても、顕在化しているか潜在化しているかに関わらず、作者とは異なる、物語を「語る」表現主体／フレームを想定することができる。

本発表では、存在論を中心に据えながら関係性理論を援用した森本浩一と、ジェラルド・ジュネットのナラトロジーを中心に C・S・パースの記号学を経由した小池隆太が、マンガにおける「語り」は読者が解釈することで初めて生成される主観的なものであるという共通の結論を導き出したことについて検討する。そのうえで、作品論へと接続可能な批評理論として「ストーリー・マンガ」における「語り」を捉え直す。というのも、読者の物語認知のあり方を問題とした森本ならびに小池と、あくまで具体的なテキストを解釈することを想定し批評理論としての「語り」に着目した本研究は、目指す方向性が異なるからである。よって、本発表で問題とするのは物語認知についてではない。むしろ、森本と小池の結論を前提としながら目指すのは、読者によって異なる解釈（主観）をまた別の読者（他者）に伝えるために用いられるような、手がかり或いは媒介項としての概念「語り手（仮）」の措定である。

発表 2

「〈黒い動物〉から〈指揮者〉へ——1930年代のディズニー製アニメーション作品におけるミッキーマウスの「変質」について」

発表：岡田尚文（学習院大学ほか非常勤講師）

司会：佐々木果（学習院大学教授）

【発表要旨】

本報告は、先行研究に鑑みつつ、初期ディズニー映画の主人公ミッキーマウスが20世紀初頭のアニメーション制作状況に対する極めて自己言及的な表象としてあったことを明らかにする。

まず、ミッキーマウスという動物キャラクターの「出自」について再確認する。黎明期の米国製アニメーションには「黒い動物」が多数登場する。ミッキー像は、よって第一に、その様な「ミッキー以前」の動物（猫のフィリックス等）との異同において捉えられなければならないまい。かかる比較が明らかにするのは、この鼠の「個性」というよりは、当時の「黒い動物」像が一様にヴォードヴィル（ミンストレル・ショー）の「黒人」表象から受けた影響である。

かかる共通点を踏まえた上で、次に1930年代におけるミッキーの「変質」（「個性」の獲得）を映画史上に位置付けたい。1928年に初めて銀幕に登場したとき、ミッキーは他の動物の身体を「楽器」化し、鳴らす「奏者」であった。物語内で自在に環境を改編するこの時期のミッキーをして作品内にいる「アニメーター」と評する向きもある。だが1930年以降の作品で、この鼠は「指揮者」役を好んで演じるようになる。その結果ミッキーは、今度はアニメーション映画の原形たるヴォードヴィル芸、即ち「ライトニング・スケッチ」の「描き手」の魔術師的ともいえるイメージに接近するのである。

発表 3

「マンガ『ゴールデンカムイ』にみるイレズミ表象の独自性——身体に地図として彫られた「刺青人皮」

発表：後藤美濤（学習院大学大学院人文科学研究科身体表象文化学専攻博士前期課程）

司会：竹内秀一（関西大学特任体育講師）

【発表要旨】

本研究は、文化人類学者の山本芳美が指摘した、イレズミの多様化やブームといった近年世界的に見られるイレズミの扱いを巡る変遷を背景に、山本が行ったメディアにおけるイレズミ表象の分析で扱いきれなかった、マンガにおけるイレズミ表象に着目した。野田サトルによるマンガ『ゴールデンカムイ』（2014-2022）は、アイヌをテーマに掲げた作品として注目される。しかし、本作において重要なのは、キャラクターのアイデンティティとしてではなく、物語の鍵を握るものとして描かれたイレズミなのではないか、という仮説が立てられる。渡部宏樹による「刺青に突き立てられる刃『ゴールデンカムイ』における皮膚上の記号作用とギャグの機能」（2023）においては、『ゴールデンカムイ』に描かれるイレズミがどのような記号的役割を持つテキストであるのか分析しているものの、ナラトロジーにおけるイレズミの重要性を指摘する観点が欠如しているのではないだろうか。

本発表では、修士論文第1章で触れる「刺青人皮」について扱う。「刺青人皮」とは、宝探しの物語プロットに欠かすことのできない宝地図が、23人の死刑囚と1人の看守の計24人の身体のイレズミに置き換わっているものである。これらは、物語を通じキャラクターの死生観の問題を示唆する。地図として身体に彫られたイレズミという設定は、手塚治虫『シュマリ』（1974-1976）や、寺沢武一『コブラ』（1978-1984）と酷似している。類似作品の中でも本作のイレズミにどのような機能があるのか明らかにしたい。本発表の意義は、先行研究が不十分なマンガにおけるイレズミ表象に焦点を当て、「刺青人皮」の物語上の機能を明らかにすることで、イレズミの新たな価値を見出すために行う。

トークセッション

「生きづらさ」を捉えるまなざし

登壇者：野本梢（映画監督）、田丸理砂（学習院大学教授）

司会：関根麻里恵（早稲田大学ほか非常勤講師）

【趣旨】

近年、視覚文化に偏在する「男性のまなざし（male gaze）」への政治的なカウンターとして「女性のまなざし（female gaze）」という概念が誕生し、注目されている。この「女性のまなざし」を意識的に取り入れて生き生きとした作品を生み出しているのが、女性映画監督たちだといえよう。

本企画では、本学卒業生であり映画監督の野本梢氏をお招きし、野本氏のこれまでの作品を本学教授の田丸理砂氏とともに振り返る。野本作品に共通する「生きづらさ」や「アンコンシャス・バイアスへの気付き」、「不可視化されてきた属性へのまなざし」等のキーワードを挙げながら、野本氏の作品のインスピレーション源や映画製作において意識している点についてうかがっていく。そして、新作『思い立っても凶日』および現在制作中の『わたしかもしれない(仮)』での取り組みにも言及したい。さらに、一般社団法人「Japanese Film Project」が『日本映画業界の制作現場におけるジェンダー調査 2023 年冬～実写邦画・アニメ映画編～』で示した、2022 年に劇場公開された日本映画の監督のうちの女性監督の人数（68/613 人）という数字をふまえ、いまだ女性にとって「生きづらい」環境——ジェンダーバランスの不均衡がいまだ解消されていない現状——である映画業界において、野本氏が直面した困難や課題など、業界の構造が抱える問題についても議論を発展させていきたい。（文責：学習院大学身体表象文化学会 大会実行委員会）

野本梢（のもと・こずえ）

埼玉県出身。学習院大学文学部日本語日本文学科卒。在学時に女子のフットサル部を立ち上げる。シナリオセンター、映画 24 区で脚本について、ニューシネマワークショップで映像制作について学ぶ。代表作に、親友への恋心を打ち明けられずに悩むレズビアン女性の葛藤を描いた短編作品『私は渦の底から』（2015）、娘の行動が他の子と違うことに悩む母親をテーマとした『次は何に生まれましょうか』（2019）、第 14 回田辺・弁慶映画祭にてグランプリと映画.com 賞を W 受賞した長編映画『愛のくだらない』（2020）など。新作『思い立っても凶日』が 7 月 26 日からシモキタエキマエシネマ K2 で拡大上映決定。次回作は『わたしかもしれない(仮)』。
